

であう・あじわう・いづくしむ  
ふるさとの川が好きです。

## 紀の川上

### 梅田恵以子の

# 川の語り部

私は大阪の中心地で生まれ育った。

小学生のころ「わたしは淀川の水で産湯したんや」。記憶はないのにこんな話をよくしていた。水道水なのだが、水は汪洋と流れる大河淀川から取水していることを教えられて知っていた。誇りとして受けとめていたのだ。

淀川は遠く、身近かに接する機会がなかった。

家のすぐ近くに長堀川があった。今は駐車場になって地名として「長堀」が残っている。これは徳川幕府が大阪城再建と城下町の復興のため水路として作られたものだ。黒に近い灰いろをしていて、とろんとろんと流れるともなく流れていた。ときどき底泥の匂いが吹き上ってくる。小さな舟が上り下りしていた。

堺筋は昔の紀州街道で船場は商業の中心地であったからか、長堀橋のたもとに齒磨会社のネオン塔がたっていた。昭和のはじめのこと、赤と青だけに変わる単純なものだったが、寝ぐずりをしてなかなか眠つかない幼女の私をおんぶして、守婆さんは毎晩のようにネオンサインを見に連れて行く。「ホレアカリナッタ」「アオニナッタ」と私をゆさぶる。

川面ににじむネオンの灯が揺れた。

長堀の川にネオンのゆるるさえかなしや守婆に死にけるかも二十歳の歌である。温かな優しさに包まれていた。

紀の川は和歌山に来るとき見た。トンネルを抜けると電車はさしみながら急勾配を下る。鉄橋を渡るとすぐ市駅だった。

「紀の川や」母はつぶやくよ

うに独り言を言う。い

つもだった。そして背すじをのばし、着物の衿元を正した。遠く見える対岸の湊が生地だった。ふるさとに向きあうときの見えがあったのか。

「じいさんは毎日上げ潮を門にまいていた。」

母の曾祖父のことだ。藩から僅かな扶持をもらい殿さんの船遊びのお相手をした網元だった。上げ潮とというのは干潮の極から満にむかう潮のこと。物ごとが上向きに進む動きをいう。門を清めて邪を払い、豊かに子々孫々の繁栄を願っていたのだらう。

何時の頃からか不漁が続いたなぜかずっと続いた。それから廃藩置県があり、明治の新政府が動きはじめる。県の奨励で網を買い整えたが明治二十二年の大水害で流出、上げ潮の願いは次の代で崩れた。

没落は相続人の運の悪さではない。水害のせいでも、白蛇が屋敷から出ていったからでもない。紀の川上流で新田の開発が積極的に進むようになって土砂の堆積が急速に増し漁場が遠くなっていった。

「ゆく川の流ればたえずしてしかもこの水にはあらず」。鴨長明の方丈記（鎌倉時代）の一節だ。流れているのは同じ水ではない。川は新しい水を海へと流し続けている。

幕末から明治、大正、昭和、平成へ、これだけでも一五〇年経つ。汽車が走り、鉄橋ができて

電化され、戦争がいくつもあり和歌山市を焼きつくした戦災、敗戦、復興、ビルが建ち、車が走り、戦後の経済の高度成長、橋がいくつも架けられ発展するかに見えたが、歪みはじめた。変らないのは川の流れ、山の姿、そして真紅に燃えて沈む夕陽

土堤に咲いていた月見草や紫のハマエンドウをついたか。

八代將軍吉宗が享保の改革で新田開発をすすめる。飢饉の予兆があったのかも知れない。

農業に関りなく過して来た私は単純に川の水があるではないかと考えていた。新しい田をつくる事は容易なことではなかった。

古墳・弥生時代の豪族紀氏は、

紀の川沿いを取材していると新田とついた地名が多い事に気付く。「しん」で呼ぶ人もいる。新しい田が出来ることの喜びをふくめた地名なのだ。

紀の川を語る時、母なる川の恵み」という言葉を使う。自然に流れる川だけを意識してきた。「水を作る歴史」に出合っ

て治水、利水に紀州流というすぐれた手法のあることを知った。

関東流に対して紀州流だ。ここに紀州人の知恵で開発された技術がある。大畑才蔵（一六四一〜一七二〇）

井沢弥惣兵衛（一六六二〜一七三八）。紀の川の小田堰、藤崎堰などの用水路を作り、紀の川平野を紀

州一の穀倉地帯に変えた。宮井用水を作り、水田の基礎を作っている。中世では文覚上人が京都の神護寺領・加勢田荘の農民たちが旱魃に苦しんでいるのを見て、巨岩を掘り割って水路を作った。なみなみと田に水が張られ、村中総出で田植をしている。いっばいのスゲ笠を見て「田に笠ばかり」と笠田に変えたといふ。

十代將軍家治は「新田開発を命ずる」という積極的な政策を打ち出した。

紀の川沿いの取材していると新田とついた地名が多い事に気付く。「しん」で呼ぶ人もいる。新しい田が出来ることの喜びをふくめた地名なのだ。

紀の川を語る時、母なる川の恵み」という言葉を使う。自然に流れる川だけを意識してきた。「水を作る歴史」に出合っ

て治水、利水に紀州流というすぐれた手法のあることを知った。

関東流に対して紀州流だ。ここに紀州人の知恵で開発された技術がある。大畑才蔵（一六四一〜一七二〇）

井沢弥惣兵衛（一六六二〜一七三八）。紀の川の小田堰、藤崎堰などの用水路を作り、紀の川平野を紀

州一の穀倉地帯に変えた。宮井用水を作り、水田の基礎を作っている。中世では文覚上人が京都の神護寺領・加勢田荘の農民たちが旱魃に苦しんでいるのを見て、巨岩を掘り割って水路を作った。なみなみと田に水が張られ、村中総出で田植をしている。いっばいのスゲ笠を見て「田に笠ばかり」と笠田に変えたといふ。

十代將軍家治は「新田開発を命ずる」という積極的な政策を打ち出した。

紀の川沿いを取材していると新田とついた地名が多い事に気付く。「しん」で呼ぶ人もいる。新しい田が出来ることの喜びをふくめた地名なのだ。

紀の川を語る時、母なる川の恵み」という言葉を使う。自然に流れる川だけを意識してきた。「水を作る歴史」に出合っ

て治水、利水に紀州流というすぐれた手法のあることを知った。

関東流に対して紀州流だ。ここに紀州人の知恵で開発された技術がある。大畑才蔵（一六四一〜一七二〇）

井沢弥惣兵衛（一六六二〜一七三八）。紀の川の小田堰、藤崎堰などの用水路を作り、紀の川平野を紀

州一の穀倉地帯に変えた。宮井用水を作り、水田の基礎を作っている。中世では文覚上人が京都の神護寺領・加勢田荘の農民たちが旱魃に苦しんでいるのを見て、巨岩を掘り割って水路を作った。なみなみと田に水が張られ、村中総出で田植をしている。いっばいのスゲ笠を見て「田に笠ばかり」と笠田に変えたといふ。

十代將軍家治は「新田開発を命ずる」という積極的な政策を打ち出した。

紀の川沿いを取材していると新田とついた地名が多い事に気付く。「しん」で呼ぶ人もいる。新しい田が出来ることの喜びをふくめた地名なのだ。

紀の川を語る時、母なる川の恵み」という言葉を使う。自然に流れる川だけを意識してきた。「水を作る歴史」に出合っ

て治水、利水に紀州流というすぐれた手法のあることを知った。



### 案内人・梅田恵以子

随筆家。一九三二年大阪市生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づくりで作曲家の森川隆之氏らとともにサントリ地域文化賞を受賞。著書に「紀のみちすがら」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」「紀州を語りつくす」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。

州一の穀倉地帯に変えた。宮井用水を作り、水田の基礎を作っている。中世では文覚上人が京都の神護寺領・加勢田荘の農民たちが旱魃に苦しんでいるのを見て、巨岩を掘り割って水路を作った。なみなみと田に水が張られ、村中総出で田植をしている。いっばいのスゲ笠を見て「田に笠ばかり」と笠田に変えたといふ。

十代將軍家治は「新田開発を命ずる」という積極的な政策を打ち出した。

紀の川沿いを取材していると新田とついた地名が多い事に気付く。「しん」で呼ぶ人もいる。新しい田が出来ることの喜びをふくめた地名なのだ。

紀の川を語る時、母なる川の恵み」という言葉を使う。自然に流れる川だけを意識してきた。「水を作る歴史」に出合っ

て治水、利水に紀州流というすぐれた手法のあることを知った。

関東流に対して紀州流だ。ここに紀州人の知恵で開発された技術がある。大畑才蔵（一六四一〜一七二〇）

井沢弥惣兵衛（一六六二〜一七三八）。紀の川の小田堰、藤崎堰などの用水路を作り、紀の川平野を紀

州一の穀倉地帯に変えた。宮井用水を作り、水田の基礎を作っている。中世では文覚上人が京都の神護寺領・加勢田荘の農民たちが旱魃に苦しんでいるのを見て、巨岩を掘り割って水路を作った。なみなみと田に水が張られ、村中総出で田植をしている。いっばいのスゲ笠を見て「田に笠ばかり」と笠田に変えたといふ。

十代將軍家治は「新田開発を命ずる」という積極的な政策を打ち出した。

紀の川沿いを取材していると新田とついた地名が多い事に気付く。「しん」で呼ぶ人もいる。新しい田が出来ることの喜びをふくめた地名なのだ。

紀の川を語る時、母なる川の恵み」という言葉を使う。自然に流れる川だけを意識してきた。「水を作る歴史」に出合っ

て治水、利水に紀州流というすぐれた手法のあることを知った。

関東流に対して紀州流だ。ここに紀州人の知恵で開発された技術がある。大畑才蔵（一六四一〜一七二〇）

井沢弥惣兵衛（一六六二〜一七三八）。紀の川の小田堰、藤崎堰などの用水路を作り、紀の川平野を紀

州一の穀倉地帯に変えた。宮井用水を作り、水田の基礎を作っている。中世では文覚上人が京都の神護寺領・加勢田荘の農民たちが旱魃に苦しんでいるのを見て、巨岩を掘り割って水路を作った。なみなみと田に水が張られ、村中総出で田植をしている。いっばいのスゲ笠を見て「田に笠ばかり」と笠田に変えたといふ。

十代將軍家治は「新田開発を命ずる」という積極的な政策を打ち出した。

紀の川沿いを取材していると新田とついた地名が多い事に気付く。「しん」で呼ぶ人もいる。新しい田が出来ることの喜びをふくめた地名なのだ。

紀の川を語る時、母なる川の恵み」という言葉を使う。自然に流れる川だけを意識して見たる。紀の川を配って見る稔りの秋は心の安らぐ風景となる。

# 紀の川



金田家門長屋  
根来寺の門前町本通りに面したナマコ壁の美しい建物で、寛政9年（1797）頃に建築されたとされ、当時の豪農の勢威を思わせる。近くには江戸時代の大庄屋屋敷・増田家（重文）などがある。



企画制作 / 和歌山毎日広告社

であう・あじわう・いつくしむ  
ふるさとの川が好きです。

## 紀の川 下

梅田恵以子の

# 川の語り部



飛び越え石

だった。正月、祭り、来客用に使われた。サバずし、サバめしきずし、塩サバの煮物など。すしは柿の葉に包まれた押すし。橋本市や伊都地方、五條も吉野も柿の葉ずし地帯だ。サバが貴重だった山里では、向うが見えるほど薄く削いで使う。しかし確かなサバの匂いと味わいを持っている。

「塩サバは紀の川で運ばれ、橋本で下ろされたのですから、柿の葉ずしのルーツは橋本ですよ」と熱心に話してくれた人がいた。

五條市に住み川の生きものや人々のくらしに詳しい御勢久右衛門さん(奈良産業大学名誉教授)も柿の葉ずし育ち。「このすしに使う柿は洪柿で方言で田舎どが大柿と言います。標高が五〇〇米までの低い里山、人家付近に自生しているのです」。谷崎潤一郎の「吉野葛」に夜食に食べた熊野サバは美味だったとあるように、五條のサバも熊野灘から来たという。

山の道も川の道も味を運んだ。またアユやジャコ(オイカワ)、ヤマメなどの

川魚のすし。生の酢もおいしいが、素焼きした魚の甘露煮。煮汁がすし飯に染みたまわいも格別。数年前橋本川の河川改修があり、川沿いの町が立退きになった。もともとは商家が船宿だったのだらう。川に向ってが表なのか、それぞれの家に川に下りてゆく石段があり、張り出した吹きっさらしの縁など、古い情緒があふれていた。裏通りは狭い露路で、連子格子のある立派な家、軒の低い

案内人・梅田恵以子



随筆家。一九三一年、大阪市生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づくりにて作曲家の森川隆之氏らとともにサントリー地域文化賞を受賞。著書に「紀のみちすから」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」「紀州を語りつく」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。

写真館があり、時折お稽古の三味線が聞こえてきた。最後まで堺屋旅館が営業していた。アユずしや柿の葉ずしが名物で、廊下を歩くとキツシキツシと音がする古い建物だった。温さがありよきはやっていった。明治・大正の文学散歩をしているような匂いする町だった。

あの町並が私の前から忽然と消えた。覚悟はしていたが失うことは悲しみだ。橋本川は何事もなかったように流れている。

塩市がたつ。水運で栄えた。川船仲間が商売繁盛と船路安全を願って祀った太神社。川の祭りは笛と胡弓と三味線で、川という字のハッピを着て船だんじりを曳きまわす。

### 紀州紀の川境目(さく)の花は紀州で根は大和

真土山が紀州と大和の国境であり、飛鳥・大和時代に南海道があった。支流落合川が流れている。川の中に西岸に張り出した石があり、和歌山では「飛び越」という。雨がふって川が増水しなければ川を飛び越えて渡ることができた。紀州へ下る思い、大和に帰る思い。いずれも熱い思いなのだ。太古から道があったのだ。岩が摩滅している。すべすべしている。どれだけの人がこの石を踏んだか。

隅田をすぎ紀の川が吉野川と名を変える。阪神大震災のあと近畿の活断層の地図を手に入れた。紀の川から吉野川そして伊勢の榑田川へとみごとに紀伊半島を西から東に切っている。中央構造線という日本一の大規模な断層線という。川はその断層に沿っている。

ある晩秋、葛城山系の燈明嶽の山腹(標高七〇〇米)にある山の村の堀越観音を訪ねた。山の壁にへばりつくように集落がある。カヤの木がたくさんあった。帰りに蔵王峠に寄った。凄い崖だ。そのはるか眼下にキラキ

ラ光る一筋の線が見える。白蛇のようでもあった。「紀の川ですよ」。同行者は言った。目眩のような感動が走った。「キノカワ」。私はつぶやいた。地球の壮絶な割れ目に出合った。鋭利な刃物で切り裂かれたような断層だった。

私は紀の川を書くためにたくさんの本を読んだ。「紀の川水の歴史街道」はつい読み耽ってしまった。いろいろの人の川への思いと視点。「川の道」(八坂書房)に岩田定雄さんが書いた「紀ノ川」の冒頭は印象的だった。「和歌山城の天守閣から遙か東方に三角形をした秀麗な山が見える。伊勢と大和の界に聳える高見山(二四九米)である。一〇〇キロ以上も離れた山が見えるのだらうかと疑問に思われるであらうが」。

また和歌山市の御伊勢橋(紀伊国名所図会)からも、川合小梅(一八〇四—一八八九)の日記から、「楠右衛門小路からもよく見えた」と引用している。高見山は東吉野村にある。車で川を遡ってゆくと大淀町あたりを過ぎると見えてくる神々しさのある山だ。昔は空気が澄んでいたから、そして山を意識していたから見えたのだらう。

和歌山の人は東方をふり仰ぎながら大和への思いを馳せた。紀の川の源流へある時は歴史を訪ね、谷崎潤一郎の「吉野葛」など何度モ川を登っている。吉野離宮のあった宮滝。菜摘紙すきの国橋。大和・伊勢往還の道に小富士のような高見山が見える。

水の恵みは近畿の屋根といわれる大台ヶ原から発する。「一ヶ月三十六日雨が降る」。ほど世界的な多雨地帯で、吉野川から紀の川へ、北山川から熊野川へ、また伊勢の宮川へ流れ、大きく紀伊半島を水でつないでいる。水の豊かなところに文化が発達する。万葉の歌びとの心も川に寄せられた。



次回掲載は6月20日、「有田川」です。企画制作 / 和歌山毎日広告社

であう・あじわう・いつくしむ  
ふるさとの川が好きです。

有田川

# 梅田恵以子の 川の語り部

人は誰でも忘れられない風景をいくつか持っている。そこに感動があったからだ。

昭和二十二年（一九四七）戦争が終って二年後の夏、学校からの募集があり、高野・龍神へ行った。和歌山から汽車と電車・ケーブルを乗り継いで高野山へ。大門を正午に出発。歩いて龍神温泉まで行く。三泊四日の旅だった。一泊目は花園村の新子へ。日が暮れるまで歩き続けた。

「着いたぞ」と先生の声があった。そこから播鉢状の急坂を下った。川音がする。川沿いを歩いていたのだ。水量が豊かで道までしぶきが跳ねていた。「有田川だよ」と聞いた。不思議な気がした。紀勢線の鉄橋をわたる私の知っている有田川ではなかった。紀の川を上ってきて、高野山から歩いて有田川というのは大阪で暮らして来た十六歳の少女の常識では納得できなかった。

宿について、荷物を置いて、食事までの僅かな間を川まで走った。宿のすぐ下が川だった。私はしゃがみこんで川の水に両手をひたした。夏の山水の冷たかったこと。見上げると峰の空間に茜いろが残っていた。なつかしい匂いがする。山の木々なのか。水が匂うのか。谷底の村はすっかり闇だった。

それから六年、昭和二十八年和歌山は未曾有の大水害に襲われた。狂ったように降り続く雨。私は和歌山市水軒口の家で豪雨を見ていた。家の横の大水道があふれて、庭の池の鯉が芝生で泳いでいた。雨の中必死で鯉を助けた。紀の川の堤防が切れて

河西地区が水浸しだという話が聞えてきた。

紀州を書くため取材で各地を訪ねるようになって、あの有田川を見たいと思った。手にふれたさわやかな山水に、もう一度触れてみたいと。花園村に住む歌人の部矢敏三さん（元村長）にお願いで案内していただくことになった。しかし水害で小さな谷底の村は流され跡形も無かった。「河床が六メートル上がりましてね」。返す言葉もなく立ち戻した。そこには私の知らない有田川があった。

泊った宿は橋本屋。龍神街道に沿っていたという。駐在所もあつたらしい。この宿は部矢さんの親戚の家で、戦後体をこわした時に暫く療養していたのだそう。川音が聞こえる宿だった。あの新子村を語る人も少なくなつたのではないかと。

郷土史に興味を持ちはじめた頃、古書店で笠松彬雄の「紀州有田民俗誌」を手に入れた。昭和二年発行。この時代は柳田国男が「郷土研究」を発刊し、日本中がこれに燃えた。粉河寺の前管長逸木盛照さんも「紀州民俗誌」を出している。川といわず、山も町も、俚唄や子ども唄伝承などで古い時代がいまもよみがえった。

## わしの殿さん高野で大工 流れてくるぞえ鮎鱈

「有田民俗誌」の冒頭に出てくる俚唄で「有田川の水源は高野の霊地からくる。有田川で鮎鱈を拾い、高野山で仕事をしている夫を思ったのだ。」

先年亡くなられた画家の雑賀紀光さんが清水町に紙すきを再

現するのだと熱心に話されていた。紀光さんの生家が保田紙な

どの卸業をしておられたそう。昭和五十年清水町へ同行させてもらった。海南市から貴志川を上り遠井峠を越えて清水へ出た。有田川がゆったり流れている盆地だった。高齢者生産活動センターに合せて紙すき場を再現するという。

三田の左太夫は紙すきならうて山の保田は紙で食つ紙素打唄笠松左太夫は紀州藩主徳川頼宜の命を受けて製紙を起した。この人は紙づくりだけではない山里に池を作り五つの溝をつけ「鳥も通わぬ弁天山」これは峻険な山を掘りさいて作った。難工事の上「水」を引き豊かな水田を作る。清水町に扇状にひろがる蘭島は名所になっているが、昔は笹原であったものを左太夫が美田にした。

花園 清水は水がいいのでワサビが自生していた。このワサビの葉を利用してサバずしを包む。「梅田さんが好きやから」と堀江茂一さん（故人）がいつも作ってくれた。これが今は清水の名物になっている。山菜料理をはじめたのが「赤玉」だ。タラにイタドリ、ムカゴ、ウド、サワガニ。飽食の時代に素朴さが受けた。ウナギ、アマノ、アユ。その中でもキギ（方言）といわれる魚、高野の糞食という異名を持っているのが面白い。

## 殿に見せたい田舎の川原 蟹を戦するよさげ

中世の頃、この静かな山里が



案内人・梅田恵以子

随筆家。一九三二年、大阪市生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づくりにて作曲家の森川隆之氏とともにサントリー地域文化賞を受賞。著書に「紀のみちすがら」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」「紀州を語りつく」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。

戦いに明け暮れた。高野衆徒と清水の保田一派、保田城の籠を流れる有田川の河岸に、田舎の積がある。毎年夏になると

川面が朝霧夕霧に閉ざされる。夜はここで壮絶なホタルが乱舞したらしい。それが高野と保田氏の出合い合戦を思わせるものがあったという。

## 保田城主の千疊残り 蟹可愛いや戦する

この蟹合戦も七・一八水害で殆ど消滅した。

高野に発した有田川は花園村、清水町、金屋町、吉備町から有田市へ。みかん舟は吉備あたりから。昔はみかん舟が川を下った。昔は

みかん舟に花嫁が乗っていた。なれずしを包むアセ（暖竹）も吉備あたりまで。きのくに線が有田川の鉄橋を走る。みかん地帯を走る。どこから来たのか親子づれが、天まで耕された段々畑を指さして、「おとっさん、山の上までみかんよ」と顔をかがやかせていた。今は畑までみかんだ。私は有田が除虫菊の白い花に埋もれていたことを覚えていた。蚊取線香の原料だった。



わさび寿司



# 有田川

であう・あじわう・いつくしむ  
ふるさとの川が好きです。

## 日高川

# 川の語り部

梅田恵以子の



せると自愛した。

日高川を書く。  
心が少しづつ高揚してくるの  
を感じる。

この川は私の遺伝子に大きく  
居座っているからだ。

うねうねうねりながら、小山  
の山裾をひとまわりするかと思  
えは方向を変える。蛇行し「滝」  
と呼ばれるほどの急流だ。寒川  
萬七著「筏師」は日高川八滝を  
書き残している。

佐井の鳴滝 山路の松皮  
筏のいやこそ 見て通る

「滝」の滝神さんに祈りなが  
ら下った。「筏師は滝の肩で口  
をすすぎ、ホーホーと滝神さん  
を呼び、無事通過を祈った」と

この激流を乗りきる技を買わ  
れて鴨緑江に出稼ぎに出た。

樺山ダムが出来て川の様子が  
変わった。蛇行する川だったので  
大きな洪水にたたび見舞われ  
ている。人も家も家畜も川にの  
まれる。「あれは清姫さんがあ  
まれたのや」「川は女や あば  
れたのや」

これ  
は男の言い草。洪水を重ねて土  
地が肥沃になるといふ。紀の川  
平野について日高平野がある。  
一里(四キロ)の棒が振りまわ

源流は護摩壇山、龍神  
の山深く 仏法僧が鳴く。

そしてふっふっふと温泉  
が湧く。美人の湯だ。肌  
がすべすべする。女性「こ  
んな湯にあこがれる。

役行者が修行で大和葛城から  
熊野を目指した。熊野の金を探  
しに行つたのではないかとい  
う説は面白い。修験道の開祖、ま  
た熊野信仰の基礎を築いた。「特  
有の宗教的環境による」銭谷武  
平著「役行者の謎」。熊野権現  
は神秘的な自然の中にある。

修験の途中、難陀龍王の夢の  
お告げで、龍神の湯を発見。弘  
法大師が湯場を開き、紀州家初  
代頼宣公が温泉を保護した。歴  
代藩主も温泉に癒しを求めたの  
だろつ。「御殿」と名の付く旅  
館がある。温泉もいいが水がお  
いしい。湯上りに何杯もおかわ  
りした。

書きながら水の甘さを思い出  
している。川の風景が見えてく  
る。夏の夜川岸を歩いていると  
西瓜の匂いがする。アユが匂う  
のだそつだ。山間に立ちのぼる  
湯けむり、万緑の山、何より空



日高川を渡るとき道成  
寺の塔が見える。安珍を  
追つて清姫がくる。川を  
渡るとき船頭に断られ、  
清姫は川に飛び込んだ。  
その時蛇の姿をしていた  
といふ。見たわけではな  
いが聞かされ続けている  
と清姫の勢いが見えてく  
るのだ。水音まで聞えて  
くる。



# 日高川



案内人・梅田恵以子

随筆家、一九三一年、大阪市生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づく  
り』で作曲家の森川隆之氏らとともにサントリー地域文化賞を受賞。  
著書に「紀のみちすがら」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」  
「紀州を語りつく」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。



宮子姫(かみなが姫) 山崎子画

は賀茂比売との間  
に長女宮子が生ま  
れとある。葛城  
の賀茂氏となが  
りがあるのではと  
龍神の湯を発見し  
た役行者も賀茂氏  
の関りを持つ。  
視点を変えて見  
ると違う歴史が見  
えてくる。学者が  
掲げる正史とい  
うもの、民間に語り  
継がれた稗史。伝

宮子が海女だったとか、髪  
の長 承 民話の中からの発見だ。  
い娘で髪長姫とよばれていた。  
その宮子の髪を雀がくわえ  
て都(奈良)の藤原不比等の庭  
に落した。不比等は時の権力者  
だった。「この美しい髪的女性  
を探せ」と全国に使者を出す。  
宮子姫は不比等の養女になり、  
文武天皇の后になった。この伝  
説にかくされているものは何か  
不比等とはどんな人だったのか。  
日本のシンデレラ物語だ。

しかし都に上つた宮子姫はな  
かなか新しい生活に馴染めず  
つつつとして過す日が多くなる  
のを、文武帝が宮子を氣遣い、  
紀州に置いて来た観音さまのた  
めに寺を建てることになる。天  
皇の勅願所として、普請奉行は  
紀道成。寺の造営用の木材を探  
しに奥日高の山に入り降りはその  
木を伐にして日高川を下る。

川的美観は筏のりにとっては  
難所だ。道成の筏は急流の岩場  
で遭難した。帝はこれを哀れみ  
遭難場所の見下せる山腹に紀道  
神社を、寺は道成の名にちなん  
で道成寺とよばれる。合せて紀  
道成となる。紀道神社にはクス  
ノキを植えない。山でクスノキ  
を伐り出してその筏で遭難した  
からだといふ。伝承されたこと  
をそのまま信じて書いている。

クスノキは関東以南の暖地海岸  
に多い木だ。雀は小鳥ではなく  
人の名前だと考えてみる。藤原  
不比等に宮子様がこんなに成長  
されましたと告げに行つたと考  
えてみるべきだろつ。

上田正昭著「藤原不比等」に

日高川流域は古代から栄えた  
ところなのだ。正史からは否定  
されているが八代將軍吉宗の母  
お由利は中津村出身。この家も  
水書で流れた。「倉に吉宗のジ  
ンベがあつたとおはあちゃん言  
つてた」「あの倉があつたら」  
と嘆く人たちがいる。井原西鶴  
の村とのかかり、高津尾の駒  
場清浩さんの家の仏壇に、歌舞  
伎女形の祖の芳沢あやめの位牌  
がある。川辺町入野の向畑家は  
南方熊楠の父親の出身地。熊楠  
はある日父のふるさとを訪ねた  
和佐山の権爺穴の洞窟にコウモ  
リを探しに行つたと書いている。  
龍神村から美山村、中津へ。

このあたりは筏師気質が生きて  
いる。豪快で、発想の転換の早  
さ、行動力だ。三十木矢之助井  
原(も加えておこつ)。文武両道  
笛の名士であったと聞く。人脈  
は多彩である。

近代になって沖野岩三郎、大  
仏次郎などの作家、ひよつとし  
て五味康祐は龍神の人ではない  
か。日高川からいろいろ思いを  
ひろげる。ここは私の川だから  
だ。

次回 富田川は8月22日掲載予定です。  
企画制作 / 和歌山毎日広告社

であう・あじわう・いつくしむ  
ふるさとの川が好きです。

## 富田川

# 梅田恵以子の 川の語り部

熊野詣が盛んな時、最も多かったのは後白河法皇の三十三回、後鳥羽院の二十八回が記録されている。富田川を遡る中辺路街道は御幸みちであった。とりわけ歌人であった後鳥羽院は熊野へ熱い思いを抱いていた。

建仁元年（一一〇一）、院は二十一歳、四度目の熊野御幸に藤原定家ら歌人数人を伴った。「熊野詣に従駕した歌人によって、新古今集が成った」といふことは、その歌風を考えれば、上で大きな意味をもつものと思われ、（くまの文庫「詩歌」）。万葉調古今調に新古今調が加えられ三大様式となる。幽玄体といわれる感覚的な象徴美が追求された。

若い頃は京の雅びとして捉えていたこの和歌集が熊野の「風」を持っていったことを私は感激した。熊野は新古今の道である。

北条追討の兵をあげ、承久の乱が起り、後鳥羽院は隠岐に流された。四十二歳、十九年間流人生活を過し隠岐で亡くなっている。乱がなければ院の熊野詣ははてしなく続いたであろう。

昭和から平成への私の熊野路への小さな旅は一〇〇回をはるかに越えている。車で移動しているから難行苦行ではない。道路もこの三十年で整備された。今は安らぎを求めに行く旅である。自分で運転しないので道は覚えな。風景を記憶する。

田辺からしばらく走ると富田川に出る。いつ来てもふっと懐かしさがこみ上げてくる。川岸にアシがヨシが群生しているところがある。富田川下流域は昔沼地だった名残だ。彦五郎の土手がある。何の災いもなく流

れている様に見える川も度々洪水に見舞われた。洪水に苦しむ人のために彦五郎は自ら人柱となって堤防を築いた。

郵便橋がある。ここには郵便物を運ぶ渡しがあつた。どんな山間僻地へも運ぶのだといふ当時（明治四年）の国政の勢いが見えてくる。明治十二年（一八九〇）橋が架けられた。和歌山県下では一番目だといふ。道は三二一号线

ふっと視界が開山で風が鳴る。鳥の声もする。「静寂」という表現がいいだろう。自然と一体となれる時問だ。抹茶のもてなし。この榎葉でばしの「無の時を過した」

だるま寺とよばれる興禅寺へ吉田啓室和尚（前任職）を訪ねることも、熊野へ行く楽しみのひとつだ。堂のわきに音をたてて川が流れ下っていた。時折裏山で風が鳴る。鳥の声もする。「静寂」という表現がいいだろう。自然と一体となれる時問だ。抹茶のもてなし。この榎葉でばしの「無の時を過した」

後日「川」は天保年間に開削された農業用水路の清水溝手の一部である事を知った。寺のまわりは一面の水田で水を得て農業が栄えた。田植をすませた畦にたつと、青田に雲の走るのが見えたので、思わず立ちどまる。鏡のようだ。山も写っている。心が澄んでゆくのを感した。

ある日、古座町で取材をしているところに、姉妹とこの三人の女性が私を訪ねて来た。話はずんで、何の話からか「先祖がねえ、鉾山を支配していたよつて」「ごなの」「上富田の市ノ瀬」「タノウエです。田上圃六といふ先祖がいました」「母親が言っていました。川の向うに狐火が飛んだと」「山が光っていたそうです」「赤き実のなるその下に」「財宝がある」といふ言い伝え。後に掘り返してみたら何もなかった。

この話から富田川流域に鉾山のあったことを知った。清水鉾山とか鉾川の鉾山を言うらしい。興味があるので、和歌山県の歴史散歩、など数冊の本

富田川中流の右岸に西谷川と合流するところが中辺路町真砂道成寺物語の清姫の生誕地だ。ふるさと清姫に優しい。暮や屋敷跡があり、近くの一願寺の過去帳に清姫の名前が出ている。本当に色恋だけで安珍を追ったのだらうか。真砂は「細かい砂」の意。真砂庄司の娘というのは砂鉄が砂金を製錬している家だったのではないか。白浜市ノ瀬、鉾川にもあるように、熊野は鉾物資源が豊富で、すぐれた製錬術、製炭術



潜水橋



郵便橋

# 富田川



## 案内人・梅田恵以子

随筆家。一九三一年、大阪生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づくりにて作曲家の森川隆之氏らとともにサントリー地域文化賞を受賞。著書に「紀のみちすがら」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」「紀州を語りつく」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。

を読みあさった。確かに銀銅鉛が出た。富田川は白浜町の富田に流れ出る。日本的に有名な白浜温泉に囲まれる鉛山湾がある。湯崎は昔、鉛山村と呼ばれた。十六世紀はじめには鉛を掘っていた。白浜にある山神社は金山彦命を祀る。市ノ瀬には鉾山の入口坑口があり、白浜の鉛山にも鉾六が三〇〇ほどあるという温泉だけではない。鉾物資源を採って豊かだったのだ。

「夜中遠望して光を発する山は、銅が銀を埋蔵していることがある」（金属の文化誌）。富田川の支流の鍛冶屋谷川。出土した銅鐸の話。一之瀬銭という通宝のことも気になる。

何より語り伝えられた話の大切さをあらためて私は感じている。子孫はナゾめいた言葉を解いてみることに。

富田川中流の右岸に西谷川と合流するところが中辺路町真砂道成寺物語の清姫の生誕地だ。ふるさと清姫に優しい。暮や屋敷跡があり、近くの一願寺の過去帳に清姫の名前が出ている。本当に色恋だけで安珍を追ったのだらうか。真砂は「細かい砂」の意。真砂庄司の娘というのは砂鉄が砂金を製錬している家だったのではないか。白浜市ノ瀬、鉾川にもあるように、熊野は鉾物資源が豊富で、すぐれた製錬術、製炭術

富田川の源流は笠塔山。果無山脈や日高川丹生川など地図の上では簡単に見えるが、一〇〇〇メートル級の山が並び、人が近寄ることも拒否し続ける紀伊半島の秘境。深山幽谷、どこかで水が生まれ、湧きこぼれ、溪谷の流れとなる。網の目のように水系がめぐり集って富田川に流れる。目に見える川となる水だけではない。木に貯えられ、土に滲みた水。雨も霧も水の源点自然の恵み、森の木々からの贈りもの、生命の水。それが二百年、三百年経て地上にわき上がる。白浜町「富田の水」はその長い時間だけの味がある。

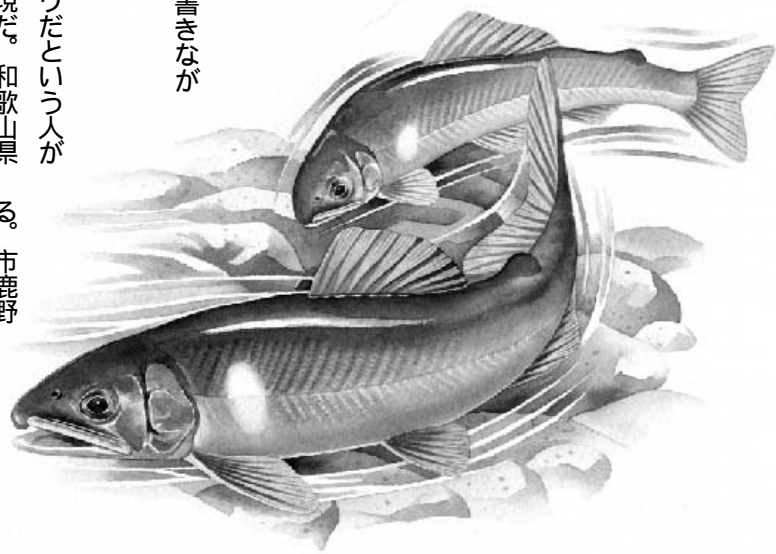
次回日置川は10月24日掲載予定です。  
企画制作 / 和歌山毎日広告社

であっ・あじわう・いつくしむ  
ふるさとの川が好きです。

日置川

# 川の語り部

梅田恵以子の



和歌山の川の旅を続けている。毎日「川」を考えている。輝いている川がいくつもあ

木に学ぶ。川を書きながら思い出した。

川波がキラキラしていたのは日置川の安居の風景だ。ここは広い川原となだらかな山が向いにあり、その山裾を湯湯と川が流れていた。いちどきに新緑が吹き上がった木々は、浅みどりの絵具を流したように濡れていた。その正午の光に出合ったのだ。サギが一羽、岩にいて、ど

川を地球のシワだという人がいた。面白い表現だ。和歌山県は特にシワが多い。川ごとに少しずつ異なる文化を持っている

市鹿野

は朝霧夕霧の深いところなのだ。霧に揉まれて茶の葉が育つ。これも川の恵み。二十数年前日置川の紅茶に興味を持った。戦後は出荷されていたらしい。インドやセイロンでなく、紀州の山中で生産されていた。製法を変えると、緑茶も紅茶になる事を知って感激した。

昨年、市鹿野の上村誠さんを訪ねた。お茶一筋の人である。

何年たってもその情熱は変わっていません。

前回は熱い御飯に新茶をふりか

けて食べた。ハラとエラを取った生炊き上げる醤油めし。

炊き上がって

からネギで仕上げる。

「冷やっこなつてもうまいよ」と折箱に入れてくれた。落アユの水炊きは中島で、地元の下謙三さんに招かれて食べた。もみじおろしにポン酢で、「アユはええだしがでる」と、川の音と風、晩秋の川原にほのぼの白い湯気、日置川のアユ自慢もたつぱり聞いて、満喫した。帰ってからアユの匂いがした。

この町はお茶の産地でもあ

る。市鹿野

は朝霧夕霧の深いところなのだ。霧に揉まれて茶の葉が育つ。これも川の恵み。二十数年前日置川の紅茶に興味を持った。戦後は出荷されていたらしい。インドやセイロンでなく、紀州の山中で生産されていた。製法を変えると、緑茶も紅茶になる事を知って感激した。

昨年、市鹿野の上村誠さんを訪ねた。お茶一筋の人である。

何年たってもその情熱は変わっていません。

前回は熱い御飯に新茶をふりか

けて食べた。ハラとエラを取った生炊き上げる醤油めし。

炊き上がって

からネギで仕上げる。

「冷やっこなつてもうまいよ」と折箱に入れてくれた。落アユの水炊きは中島で、地元の下謙三さんに招かれて食べた。もみじおろしにポン酢で、「アユはええだしがでる」と、川の音と風、晩秋の川原にほのぼの白い湯気、日置川のアユ自慢もたつぱり聞いて、満喫した。帰ってからアユの匂いがした。

この町はお茶の産地でもあ

る。市鹿野

は朝霧夕霧の深いところなのだ。霧に揉まれて茶の葉が育つ。これも川の恵み。二十数年前日置川の紅茶に興味を持った。戦後は出荷されていたらしい。インドやセイロンでなく、紀州の山中で生産されていた。製法を変えると、緑茶も紅茶になる事を知って感激した。

昨年、市鹿野の上村誠さんを訪ねた。お茶一筋の人である。

何年たってもその情熱は変わっていません。

前回は熱い御飯に新茶をふりか

けて食べた。ハラとエラを取った生炊き上げる醤油めし。

炊き上がって

からネギで仕上げる。

「冷やっこなつてもうまいよ」と折箱に入れてくれた。落アユの水炊きは中島で、地元の下謙三さんに招かれて食べた。もみじおろしにポン酢で、「アユはええだしがでる」と、川の音と風、晩秋の川原にほのぼの白い湯気、日置川のアユ自慢もたつぱり聞いて、満喫した。帰ってからアユの匂いがした。

この町はお茶の産地でもあ

る。市鹿野

は朝霧夕霧の深いところなのだ。霧に揉まれて茶の葉が育つ。これも川の恵み。二十数年前日置川の紅茶に興味を持った。戦後は出荷されていたらしい。インドやセイロンでなく、紀州の山中で生産されていた。製法を変えると、緑茶も紅茶になる事を知って感激した。

昨年、市鹿野の上村誠さんを訪ねた。お茶一筋の人である。

何年たってもその情熱は変わっていません。

前回は熱い御飯に新茶をふりか

けて食べた。ハラとエラを取った生炊き上げる醤油めし。



案内人・梅田恵以子

随筆家。一九三一年、大阪市生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づくりに作曲家の森川隆之氏らとともにサントリー地域文化賞を受賞。著書に「紀のみちすがら」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」「紀州を語りつく」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。

「日置川って何でしょう」と森田勝治さん（テレビ和歌山社長）にこんな変わった問いかけをした。この人とも三十年来のつき合いだ。日置川の話をすると顔が輝く。この川筋で生まれ育ち、川とともに過した少年時代を思い出すのだ。答は「安宅氏」だった。町の助役、川上涉さんにも同じ質問をした。この人も「安宅氏」。「あたける」とい言葉があるでしょう」「暴れることですね」「あれは安宅から来ているのです」

安居の農業用水を祖父の代から三代かけて作り上げた鈴木七右衛門重秋、日置川流域を美田に変えた。私財も投じている。超人間的な村の指導者だと書いている本もあった。

白浜の富田に日神社、河口近くに日の出神社。海の日の出を見ることが出来るのは東牟婁から串本まで。潮岬に太陽神祭祀跡と見られる森がある。川の古代に何があったのか。

紀北の青洲（華岡）、紀南の肆成と呼ばれる医人小山肆成（一八〇七〜一八六二）も日置川の久木に生まれている。この頃熊野全域に天然痘が流行した。一

村が壊滅するほど猛威をふるった。

熊野詣の大辺路では安居の渡しを、中辺路の近露は「この世の不浄を払う」として水垢離をした神聖な日置川。

た。意味もなく暴れるのでは。南北朝から戦国時代にかけて、この地に拠点を持ち、熊野水軍を率いて淡路・阿波にも城を持ち勢力をひろげた豪族だ。地名に安宅、城もあった。川も安宅川と呼ばれていた時代もある。

敵方には、あたける「軍団と見えただろう。力があつたのだ。知力と行動力でひとつの勢力を築いた。これがみんなの誇りだったのだろ。語り継がれた。

探れば探るほど面白い日置川に魅せられている。

秀吉に降り、関ヶ原合戦では豊臣方の石田三成に、大阪夏の陣では秀頼を守り、常に豊臣方を貫いた。

この不屈の精神が後々に人たちに受け継がれている。

私は日置という地名に興味がある。「日を置く」は何だろう。源流の十津川に「玉を置く」で玉置山、玉置神社がある。玉置と海を結ぶ川が日置川である。



# 日置川



日置川の渡し場跡



日の出神社の御船祭

次回「古座川」は11月14日掲載予定です。企画制作／和歌山毎日広告社

であう・あじわう・いつくしむ  
ふるさとの川が好きです。

### 古座川

# 川の語り部



### 案内人・梅田恵以子

随筆家。一九三一年、大阪市生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づくりで作曲家の森川隆之氏らとともにサントリー地域文化賞を受賞。著書に「紀のみちすがら」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」「紀州を語りつく」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。

その山を歩いて回ると突然水音がして滝が現われたのだ。意外と低かった。山崩れがあつて滝壺が埋つたのだらう。水はその岩場にもぐり伏流水となつて流れている。

「うずみ」という料理を取材するために行った。コブと椎茸のだしに御飯をうずめて、柚子、ネギ、コマの香りをいたたくその帰り、私の乗った車が山道のカーブをまがり切れず、直進宙に浮いた。そして闇の中でゆっくり一回転。スローモーションを体感した。車は前方に落下するしかた。「死ぬのやな」

落人たちが来た。人情が良かったのだらう。風景にも心ひかれたのかも知れない。平家源氏承久の乱(一一二二)を遁れて西川に住みついた村上氏。村上神社がある。北条氏との戦にやぶれて隠岐に流された後鳥羽院の復権を願つて待ち続けたのだらうか。「後鳥羽院」と書

どこが古代の匂いにする田原の木葉神社。ここはコノハナサクヤヒメや神功皇后の神話の世界だ。祭りは巻コザを背負つて赤ん坊にしたて、枕と乳型を身につけ、夜明けののろろとした神事が始まる。「ネンネンコロリヨ オロロノヨ」子どもを覆させる時の呪文のような言葉。この祭文が日本の子守唄のルーツではないかと思ひ続けている。

平井の盆行事は百八つのタイマツで祖先の霊を送る。夜の闇にながされた火の荘厳さ。昭和五十五年八月十五日、私はもつとつ平井に伝わるこれも私の古座川である。

澄んだ川辺に  
野ばらのかけ 白くゆれ  
水面の花ゆれ  
潤野にかかる 水くぐり橋  
清く水流れ 流れて  
古座川の五月の川の歌

で柚子がひろめいたという。「柚子ら植えて何すんなよ、柚子は一本あつたらええ」と批判されながら続けたという。「古座川ゆず酢」がようよう軌道にのりかけていた。

佐田のダム湖畔の湯の花温泉に泊る。温泉が嬉しく忘れられない旅になった。

「紀州の滝」をテレビで取材中、突然古座川の「まぼろしの滝」の話がでた。那智の滝より米一俵低いとい

う。地元の谷直起さん(故人)が誘ってくれた。とにかく行ってみよう。何の予備知識もなく同行した。真夏、山間部とはいえ炎天下、水の流れていない川を歩き続けた。滝までなかなか辿り着かない。ところどころ

「紀州の滝」をテレビで取材中、突然古座川の「まぼろしの滝」の話がでた。那智の滝より米一俵低いとい

う。地元の谷直起さん(故人)が誘ってくれた。とにかく行ってみよう。何の予備知識もなく同行した。真夏、山間部

とはいえ炎天下、水の流れていない川を歩き続けた。滝までなかなか辿り着かない。ところどころ

これは私が作詞、森川隆之さん(和大学教授)作曲の「ふるさと讃歌 紀州路一〇〇曲」の川の歌 古座川 の一章だ。古座川への思い入れをどう表現するか、どこから詩に書きはじめるか その時、潤野が浮んだ。潜水橋が向う岸に架かっている。感動した場所から書きはじめた。季節は五月、川をへだてて二面に野の緑が萌え上がっていた。草の穂が川風にゆれている。そこだけが風景に光を添えていた。魅入られたように立ちつくした。

古座川の風景が自慢でよく人を誘ふ。今案内人は私がする。必ず潤野へ行く。地名も好きだ。うるおいは水分をふくんだみずみずしさだ。しっとりとした味を伴う。それが豊かさにつながる。

江戸時代の漢字者、斉藤拙堂がこの景観を「古座峡見されば熊野の溪谷を語るなかれ」と二ツトリのトサカのように三冠山。古座川は日本の桂林だという人もいた。天柱岩や飯盛山、一枚岩、少女峰など巨岩奇岩が多い。川とこの風景が中国の桂林に似ているのだ。大塔山

古座川町を訪ねるきつかけは当時町長をされていた宮石勲蔵さん(故人)が平井の柚子のことなどふくめて、清流の町を見てほしい、書いてほしいというお話があつたからだ。昭和五十一年三月のこと、雨上がりで底冷えのする日だったが、春の気配する川はゆるやかに澄んでいた。どこをどう走つたのかわからない。川のある風景は心が和む。殆どが森林の町だと聞いたその日は高瀬の菴田ふじゑさんから地元の人から案内してくれた。

平井で柚子組合の南広三さん(故人)にも会った。林業の低迷が続いていた。山林にかかわる人たちが数人集つて「どうすりゃ」と相談した。山奥の村で道が悪い。海まで遠いし、そこ

「すくそこ」だった。田舎のすくは随分遠い。小山があつた。かいた書が残っている。また南朝方は壮絶な思いを岩に刻んだ。だしに御飯をうずめて、柚子、ネギ、コマの香りをいたたくその帰り、私の乗った車が山道のカーブをまがり切れず、直進宙に浮いた。そして闇の中でゆっくり一回転。スローモーションを体感した。車は前方に落下するしかた。「死ぬのやな」

平井で柚子組合の南広三さん(故人)にも会った。林業の低迷が続いていた。山林にかかわる人たちが数人集つて「どうすりゃ」と相談した。山奥の村で道が悪い。海まで遠いし、そこ

高知県の四万十川が日本最後の清流というが、とんでもない。くは随分遠い。小山があつた。

くは随分遠い。小山があつた。

くは随分遠い。小山があつた。

くは随分遠い。小山があつた。

くは随分遠い。小山があつた。

# 古座川

次回、熊野川は平成16年2月13日掲載予定です。  
企画制作 / 和歌山毎日広告社

であじわう・あじわう・いつくしむ  
ふるさとの川が好きです。

## 熊野川

### 梅田恵以子の

# 川の語り部

熊野恋い 熊野恋い  
山を恋い 杉を恋い

熊野を思うと人を恋するよう  
な不思議な気持ちに駆られる。こ  
の旅から帰って、すぐ熊野へ行  
く事を考えているのだから。

「川」のつく地名が多い。ど  
の道を行っても川に出会う。は  
てしなく奥深い山のどこかで水  
が生まれ、あふれて流れをなし  
ている。

昭和四十八年夏「知られざる  
熊野路を探る」のバスツアーに  
参加した。まだ鄙びとか、秘境  
の言葉がよく似合っていた。そ  
の後憑かれるように熊野取材に  
集中した。

目を閉じて思いを巡らせるよ  
いくつも浮んでくる風景がある。  
「その時」に強く感動した場所  
なのだ。音や匂い、風を伴った  
ともある。しかし二度と同じ風  
景の出会いはない。

新宮の丹鶴城跡へも行った。  
寒い日だった。熊野川と向きあ  
うことになる。さすが黒潮風土  
光は春を思わせるほど柔らかだ  
った。川は瑠璃いろをしていた。

北山川と熊野川(十津川)が宮  
井で合流する。「水合」から宮  
井に転じたのだと何かの本で読  
んだ。長さは一八三キロ(和歌  
山県内では四八・一キロ)。九  
里峡と呼ばれたのは「本国名勝  
詩誌」(明治三〇年刊)に「大  
和十津川紀に入りて熊  
野川となる。本  
宮より海口に至る水程およそ九  
里」。川下りを愛した漢詩人が  
名付けというが今はこの地域の  
人も知らない。

北山・十津川ふたつの川の水  
が出合い、楊枝川・赤木川・高  
田川など支流をふくめて海に吐  
き出される豪快な河口風景だ。  
新宮の市街地は乾いて見えた。

けめぐった。

行きたいという気持ちが話の中  
でこみ上げてきた。今すぐにで  
も行きたい。大塔川に湧く川湯  
の露天風呂、湯けむりの中で見  
上げる星空。富士屋の女将祥子  
さんはお元気だろうか。湯の峯  
のあつまの温泉がゆが食べた  
い。めはり、あゆの馴すし、う  
なぎ。

やがて熊野、熊野川は世界遺  
産に登録される。世界の人はこ  
の水の風土に感激するだろう。  
那智は四十八滝、熊野川の四十  
七滝、那智の裏滝もある。

私が熊野に心がひかれる理由  
は山河の清明さにあるが、遺伝  
子に組み込まれた熊野への思い  
があるのではないか。それが私  
になって吹きだしたのだ。

父方の先祖に旅好きの人がい  
て、天保二年から三年にかけて  
お伴をつれて諸国をまわったと  
よく聞かされてきた。その人が  
残した「集印帖」が今私の手元  
にある。諸国と聞いていたが、  
東北、中部から三重を経て熊野

また交通の要衝で木材の集散  
地だった。いかたが流れ下った  
その材木や備長炭を江戸に送り  
出す。

商いで成功した殿さんがいた。  
炭殿さまと呼ばれていた。  
新年に入って他の所用もあり  
新宮市役所の岸芳男君に電話を  
した。企画調整課長で頑張って  
いる。付き合っても随分古い。彼  
の父親からだ。熊野取材の協力  
者である。

「熊野川書くのよ」と言っと  
跳んだ声がかえって来た。「熊  
野川の流域面積、流量ともに日  
本有数の河川です。丹鶴城の景  
観は日本一ではないか。和歌山  
県で言えばさいは  
ての町新宮からの  
元気は熊野の元気だ。  
電話

を聞きながら十津川や  
玉置神社のシャクナゲ、  
北山の観光イカダ、ジ  
ヤバラ、静峡の神秘さ、  
果無山脈のときめき、  
さくらから和泉式部ま  
で頭の中を光のように駆

技能を買われたか、学識もいる。  
物見遊山ではなかったはずだ。  
旅行記など残されていない。

年令的には公職を退いてから  
で、大変な大雲取越えの道を選  
ばず、熊野川沿いを「歩き」と  
「渡し」でつないで小雲取を越  
えて本宮に詣でている。

天保三年は閏年で一年十三ヶ  
月である事を知らなかったので  
調査に少々行きつまった。しば  
らくして解けた。天保三年十一  
月二十九日、三重の巡礼導引観  
世音に参詣して、海沿いの熊野  
街道を歩き、成川のわたして紀  
州入りをしたのでは。「日本第  
一熊野山新宮、十二社御廣前、  
辰間十一月十八日、常番所、二  
十二日には、熊野大権現那智圓  
通殿、實方院執事」

なせ那智を先にしたかは市野々  
に住む友人久原脩二さんの雑談  
の中からひらいた。  
那智からは光ヶ峰、烏帽子の  
裾をとり、新宮の高田に出る。  
勿論熊野川に出て行く。高田か  
相賀口かの渡しを使って三重  
県側へ行き、川丈街道を歩い  
ている。十一月二十五日、頭  
痛山平愈寺瑠璃光殿玉前  
紀州熊野楊枝浄楽  
禅寺、蔵司」と集印



### 案内人・梅田恵以子

随筆家。一九三一年、大阪市生まれ。一九九〇年、紀州ふるさとの歌づく  
り、で作曲家の森川隆之氏らとともにサントリー地域文化賞を受賞。  
著書に「紀のみちすがら」「紀の散歩みち」「紀州 味と旅」「みちの記」  
「紀州を語りつく」他多数。平成十四年度和歌山県文化表彰文化賞受賞。

帖にある。楊枝薬師だ。熊野川  
と長旅の疲れをいやしたのだ。  
の左岸にお堂がひとつある。一  
七〇年前はどつであつたのだら  
う。後白河法皇が頭痛持ちで、  
その平癒を願って建立したとか  
京都の三十三間堂の棟木はここ  
から運ばれたとか。「あのお薬  
師さん、頭痛にきくて皆お参り  
してるよ」と聞いたが伝説が民  
間信仰として生きている。

またまた楊枝の渡しで対岸に  
行き、小口から小雲取越えで請  
川(本宮)に入っている。「日  
本第一熊野本宮、天保三年辰十  
一月、御師寺尾蔵大夫」。どれ  
も達筆で記されている。  
ある。

参詣をすませ半月ほど本宮に  
滞在している。温泉でゆったり  
束もできた。  
また紀州の川の支流を訪ねる  
旅をしたい。

# 熊野川



次回「総集編」は平成16年3月5日掲載予定です。

企画制作 / 和歌山毎日広告社